〔書　評〕

『現代日本語の語構成論的研究――語における形と意味――』

斎藤倫明著

森山卓郎

一、本書の基本的な立場

本書は、著者のこれまでの現代日本語の語構成に関する論考を中心にしつつ、それに加筆・修正が加えられたものである。言語単位についての第一部、形容詞語幹についての第二部、複合動詞についての第三部、語構成と意味の相関の事例研究の第四部といった構成となっている。著者自ら断る通り、「現時点における筆者（引用者注、著者）の語構成に関する考察の総決算」と言えるものである。

著者の立場は、「語構成要素の意味と語の構造とが具体的に一語の中でどのように関わりあいながら語全体の意味を支えているのか」といったことを重要視するところにある。つまり、本書の議論は、語構成（word formation）の様々なルールを分析するというよりは、むしろ、語構成に留意しつつ、その語彙的な意味を考察することに重点をおくものだと言える。著者が序において自らの立場を「意味論的語構成論」と仮称するように、こうした考察は、言わば「語彙的意味論」と「語構成論」の橋渡しを試みるものだと言うことができよう。従って、当然のことながら、ここでは語彙論的な意味記述に大きな力点が置かれている。書名にもこの立場は現れていて、本書は、「現代日本語の語構成論」という標題ではなく、「現代日本語の語構成論的研究」という標題になっている。なお、こうした立場は、著者の学問的系譜を反映するもののようであり、後書きによれば、森岡健二氏の形態論研究と前田富祺氏の語彙論研究に深い影響を受けた由である。

二、本書の構成

本書の議論を限られたスペースで要約することは非常に難しいのであるが、以下、構成に沿って内容を手短かに概観し、若干のコメントを述べてみたいと思う。

序では、上述したような著者の立場が示され、全体の構成のあらましが書かれている。第一部は、いわば基礎論の部分である。第一章では、形態素・単語・語彙素といった用語を著者がどうとらえているかが示される。「単語」と「語彙素」が区別され、前者は後者が「実現」されたもの（逆に言えば「語彙素」は「単語」が抽象化されたもの）という規定がある。ここでの「実現」とは、語彙素「ＡＭＥ」が単語「アメ-ガ／ヲ／ニ・・」というような語形をとるといったことである。

著者の「単語」論、「語彙素」論は、語彙論的な立場に軸足をおくものと見受けられるのであり、無いものねだりになるのかもしれないが、こうした問題を考える場合に関連してくるのが、いわゆる臨時一語などの問題や、生産的（文法的な関係での）な「語構成」をめぐる問題である。「助詞」や「助動詞」などについての著者の考えはいくらか窺い知ることはできるが、それも含めて、例えば「金欲しさの犯行」「降り始める」「駐車禁止」のようなものはそれぞれどう扱うのかなど、もう少しスペースを割いて考察されていてもよかったような気がする。ひとくちに語構成といっても、語彙的固定的な語構成と生産的な語構成とには原理的な違いがあるし、また、そうしたことを検討すること自体、語彙的固定的な語構成とは何かということを考える手掛かりにもなるからである。もちろん、一方で、両者が必ずしも截然とわけられない場合もあるのであって、そういう意味でも目配りが必要である。

第二章では、松下文法における言語単位が検討される。「連断句」を解消すること、原辞と単詞の質的違いを「単語化」としてとらえることなどが提示される。一見唐突であるが、この章は原辞論など松下文法の形態論を検討しつつ、著者の単語論を位置付けるものである。

第二部は形容詞語幹をめぐる問題をまとめた部分である。第二部第一章では、「形容詞語幹＋名詞」型の複合名詞と「形容詞＋名詞（など）」の意味が対照されている。これは、一単語として語彙内部で位置付けられた場合にいかに意味に限定が起きるかということを考える上で重要な事例である。ここでは、例えば、「重荷」と「重い荷」のように同一語幹形容詞でそのまま書きかえられるもの（ただし、「精神的に重荷となる」のような例では交換ができない）、「遅桜」と「遅く（咲いた）桜」のように条件つきで書き換えられるもの、「青侍」のようにまったく書き換えられないものなどが具体的に分類される。こうした三つのグループに分類されるということが、豊富な例と共に整理されており、興味深い。[注1]

同第二章は、形容詞語幹から派生する動詞と、「形容詞＋ナル／スル」の意味[注2]を対照する部分である。「薄める」と「薄くする」のように言い換えられるもの、「痛める」のように転義があるもの、「甘える」のように言い換えられないもの、というように分類される。さらに言い換えができなくても意味に関連があるといえるかどうかが検討される。当然、同根動詞といっても様々なタイプがあり、意味的な不一致も多いのであるが、それらが詳しく具体的に検討されており、注目に値する。

同第三章は、「タカ～（高）」の場合を例として、形容詞語幹を語基とする派生語の形態と意味を検討した部分である。ここでは、様々な語の「タカ～」からの派生のありようを検討した後、「高い、甲高い、高らか、高まる」など、語基に「タカ～」を持つ語の意味が、多義性に注意しつつかなり詳しく検討されている。「高くなる」のような連語も考察に含まれているが確かにこれは重要な点である。そして、それぞれの語の意味が、（垂直の）空間的距離の大きさ、ものごとの量・程度のはなはだしさ、そして、ものごとの質的、価値的上位性といった意味の在り方から整理されている。これは、いわば、「高さ」として認知されるさまざまな意味を、語構成論的に検討した議論だと言うことができ、興味深い。例えば「高まる」などは、空間的な意味を表さない意味となっているといった指摘や、例えば「高

らか」においては「心的高揚」という側面が背後に存在するといった指摘など、意味に重点をおいた興味深い指摘がなされている。

第三部は、複合動詞をめぐる考察である。第一章では「～返す」と単独用法の「返す」の意味対応が詳しく検討され、「間接対応」のものについて、「前項の意味との重なりが多い程」「単独用法との重なりが少ない程」、「接辞性が高い」という基準で、後項の「接辞化」が考察されている。

この「接辞性」という概念自体は、「語基」と「接辞」のある種の連続性を指摘するものとして注目される。どう記述するかの問題だけではなく、語彙的成分が文法形式化していくにあたって、どこまで元の語彙的意味の制約をうけるのか、ということとして位置づけることができれば興味深い。

「～返す」自体には「引き返す」「問い返す」のように多様な意味での結合がある。「もう一度～」という意味の「～返す」という形式も、「[本を読み]返す」のように統語論的に構成されるといっても、「～直す」などに比べると、生産性が極めて低い（語彙的に限定されている。特に、ある種の「方向性」が認識されるものに限定されていると言っていいかもしれない）。そういったことも含めて文法形式化の一プロセスとして注目すべき現象だと言えよう。

同第二章では、前項音便形の複合動詞と非音便形の複合動詞の意味が比較されている。「おん出す」（ただし評者は使わない言葉だが）と「追い出す」のように重なるもの、「追い払う」と「追っ払う」のように音便形よりも非音便形の方が意味範囲が広いもの（例えば「妄想」は前者のみ）、「吹き飛ぶ」「吹っ飛ぶ」のように意味が部分的に重なるもの、「引き付ける」と「ひっつける」のように意味が重ならないもの、といった分類がなされている。こうした観点は非常に興味深いものであるし、誰かが一度は整理してみなければならなかったことだと言えるものかもしれない。本書では、多くの例が詳しく検討されている。なお、いわゆる音便には歴史的・地理的な変遷・変異があるが、そういった点についての関連もぜひ知りたいところである。

さらに、ここでは、複合動詞がＡＢという形になってから音便化すると見るか、複合動詞の前項と後項の合成的な意味がまずさまざまにあって、それが音便化を経るかどうかで「意味が適切に配分される」と見るか、といった「モデル」の検討がなされ、後者が支持されている。例えば「ふっとぶ」の「激しい勢いで飛ぶ」といった意味を「FUKU＋TOBU」という意味構造に還元して、すでにそこにそういう意味があったととらえるという議論である。ただし、語彙的に様々な意味が固定している複合動詞の、しかも、共時論的分析において、そうした「モデル」を考える必然性がどれだけ大きいのかは、少し気になる。語彙的な現象においては、意味が透明でない場合も当然あるからである。[注3] どう分解できるのかということ自体は当然議論されてもよいが、例えば、「吹く＋飛ぶ」が「吹っ飛ぶ」の意味になるといった複合動詞の意味の生成過程の検討は、むしろ通時論的問題ではないかと思われる。なお、こうしたことは、第四部第二章の「近付く」の「近＋つく」の意味をめぐる分析など、本書の他の部分でも言えることである（後述）。[注4]

第四部はケーススタディとして、具体的な語の意味分析がなされている。第一章では、「広がる・広げる」と「広まる・広める」など、形態論的な観点からの類義語分析がなされている。「広～」において

は、「コレラが［＊広まる／広がる］」となっているように、「～マル」より「～ガル」系統の方がより「動詞化として中心的」なものであると指摘されている。第二部第三章の「高まる」などと対照するとおもしろい。結論で示される円グラフの意味領域の説明は、語義のまとめとして明快であり、日本語教育などにとっても有益であろうと思われる。

同第二章では「近寄る」が「近くに寄る」となるのに対し、「近づく」が「近くにつく」とは言えないといったことから、「～つく」が語基か接辞かという議論がなされ、「『付属V』の語基になる」として「接近する」という意味が提出されている。また、「近寄る」では、前項「近～」は後項「寄る」の意味の「確認」という機能というように、意味関係が考察されている。

三、語彙的な構成体における語構成過程の共時論的分析をめぐって

以上、それぞれの内容を概観し、若干のコメントを述べた。最後に全体的なコメントを述べてみたい。

まず、第一に、本書のような、語構成に留意しつつ、語彙論的意味を分析しようとする観点は、語彙論的な意味分析の新しい立場の一つとして大変興味深いものだと言える。意味と語構成との関連を検討するというアプローチは、阪倉篤義氏をはじめとする諸論者の多くの優れた研究成果などと連動させていくならば、語構成論、意味論の新天地を拓くものとなりそうに思われる。そういう意味で、現代語彙論の分析として、まさに、待たれていた研究だと言ってよいであろう。

第二に、本書の中心的な部分では、具体的な語を取り上げつつ、詳細に意味的な検討がなされている。語彙的現象の分析は、量的分析と質的分析とに大別できると思われるが、後者では、地道なケーススタディが基本となる。著者自らがケーススタディとするのは第四部であるが、それ以外の多くの章でも、具体的な例を挙げたケーススタディが着実に積み重ねられていると言えるであろう。ここで着実というのは、多くの用例の裏付けがあるということをも含んでの謂である。

また、特に、本書では具体的な意味分析そのものにも力が入れられている。例えば、「広がる」と「広くなる」「広まる」の違い、「高まる」と「高くなる」の違い、というように、いろいろと興味深い指摘があり、日本語教育、語彙的意味の対照研究など様々な分野でも裨益するところが大きいと思われる。

ただ、前にいくつか述べた通り、疑問を感じた点もないではない。そうしたことにも少し触れて責を果したいと思う。

まず一つは、「派生、複合」の概念など、語構成のダイナミズムに対してである。前にもふれたように、現代語の語彙論的な現象を記述する際に、ここでは、「派生」「複合」といったダイナミックな語構成上の「過程」が「共時論的」に問題にされている。

しかし、そもそも、語彙的な複合・派生の在り方とは、歴史的なものではないだろうか。現代使われている語には、それぞれに様々な経過がある。あくまで共時論として言えるのはどのような語があるのか、どういった語構成の「意識」を我々がもっているかといったことだけである。例えば「広がる」「広める」「ふっとぶ」などという語は、我々が自分で形態を構成して作るのではなく、語彙の一部として、意味・用法を「習得」するものである。従って、語構成

の部分要素の基本的な意味とその構成過程を考えても、そこに必然的な意味はない。[注5] 実際に、どういう要素がどう結合して語ができたかといった語彙論的な語構成については、ある種の偶然性も当然考えねばならないのであり、実体的な議論をしていくには、やはり、通時的な分析が不可欠である。共時論と通時論の区別は基礎的なところではもちろん必要であるが、むしろ、現在の研究段階は、いかにその両者の関連づけを考えていくかといったところにあると思われる。

また、一方で、もし、共時論な立場に徹して、生産的な「派生・複合」の関係を考えるのであれば、それはそれで納得できる。しかし、それならば、「生産的な語構成における様々な規則」といったことが考察されなければならないであろう。例えば、これこれの語構成はこれこれの理由でできない、といった、現象の一般化やその理由づけも求められることになる。

こうした点で、著者の今後の研究に注目したい。

二つ目に指摘しておきたいのは、考察結果の「論」としての一般化についてである。実は、読み進めていってどう分析が進んで行くのかに胸をときめかせているところで「まとめと課題」となり、何度か戸惑ったことを告白しなければならない。本書の性格上、具体的個別的な例に即した記述的な議論が中心となることは理解できる。その着実さは一方で良さでもある。しかし、それだからこそ、逆に、一般論としての結論がどうなるのか、どう位置づけられるのか、といったことへの目配りも一層重要になってくると思われる。なぜそうなのか、という点についての追求も希望したいところである。確かに、章の終わりにまとめとしての節がおかれているのであるが、もう少しその部分への考察の割り当てが多くてもよかったのではないか、というのが率直な感想である。また、著者によって今後の課題とされた点も少なくない。もっとも、これは、好意的に見れば著者が結論を出すにあたって、それだけ慎重だということを示すものかもしれない。この点でも、著者の今後の研究に注目したい。

最後に、記述上希望したいこともある。本書では多くの分類・記述が記号で代用される。繁雑さを避ける意味もあろうが、例えば「b と、『c、③の折衷』との混合」といった記述は、正直なところ、読みにくい印象を与える。せっかくの「語」の研究なのだから、長い語になるとしても、概念に名前を与えて整理してほしいという感想も持った。もっともこれは小さな問題に過ぎないのかもしれない。

ともあれ、著者の主張する「語構成論的意味論」の今後の発展を期待する読者は多いであろう。まさに、本書はその出発点として注目すべき著作であると言えよう。

注1　なお、単語として語彙化した場合の意味の特殊性については影山一九八〇『日米比較語彙の構造』（松柏社）の、例えば「銃殺する」と「銃で殺す」などに関する議論も参照のこと。

注2　なお、連語として分析的に言う場合との意味の違いを議論する場合に、文法的な意味関係も利用できるかもしれない。微妙な例ではあるが、例えば「A社は今年からジュースの味をもっと［薄くすることにした／薄めることにした］。」の比較をして明らかなように、「もっと薄くする」では「今の状態」に比べて「もっと薄い」状態にするという意味であるが、「もっと薄める」と言えば、「薄める」動作をさらに追加して行うという意味になる。「もっと」が状態そのものを修飾するか動作を修飾するかといった違いによると思われる。

また、さらに、本書の議論から若干ずれるのかもしれないが、「赤くする」のような「形容詞＋スル」が、対象を形容詞の属性の状態に変えるという意味をいつも持っているわけではない。例えば「人に優しくする」などはもちろん意味関係が違っている。

注3　例えば「透明度」も当然議論することができるが、それ自体は単純な記述となるだけで大きな意味は持たないであろう。

注4　「近付く」という結合自体は、上代からある語であり、現代語の立場での「つく」そのものの意味分析、すなわち、「近くに『つく』[△何かが接近する▽]」（三〇八ページ）のような分析には、やはり一定の限界ができてしまうと思われる。例えば「遠ざかる」の「さかる」を生きた語として使わず、語構成的な意識がない話者でも「遠ざかる」を習得して使うことは当然ある。複合して使う場合、意味要素の原義的な意味は共時態として直接言及するわけにはいかないであろう。

注5　だからこそ例えば異分析といった現象が起きることになる。

（一九九二年三月二十五日発行　ひつじ書房刊　A5判　三四八頁　四八四一円）

――京都教育大学助教授――

（平成六年五月十八日　受理）